

海外の話題

Covid-19 を巡る英国の迷走

農林中央金庫 ロンドン支店長 大石 稔

Covid-19 問題は全く収束する気配がない。ここ英国では現在第2波が襲来し感染者数が急激に増加してきており、人々の行動に関する規制は再び厳格化されつつある。本稿では一連の Covid-19 対応の中で英国がいかに迷走してきたかをレポートしたい。

英国は感染拡大の初動対応を誤った。政府は「集団免疫」を作るとしてあえて徹底した感染防止策を採らず、イタリア、スペインをはじめ大陸各国で感染が拡大している最中、海外からもたらされる感染リスクをほぼ無視した。結果、感染者、死者数は3月に爆発的に増加し一気に欧州の中で最悪の状況となった。慌てた政府は政策を転換し、3月下旬から都市封鎖（ロックダウン）し、生活必需品を扱うスーパーなどを除き全ての小売店舗は閉鎖、Key Workerと呼ばれる医療従事者や事業の継続上やむを得ない人間しか出勤してはならないし、公共交通機関も使ってはならなかった。一時は屋外での運動についても1日1回に制限され、ほとんど外出できなかった。一方でこのロックダウン期間中でも海外からの入国者に対しては何もチェック等を行わず、海外からの感染リスクは軽視したままであった。この厳しい規制は5月頃から徐々に緩和されてきたが、入国者の自主隔離がようやく求められ始めたのはこの緩和に移行したのと同様だった。どう考えても矛盾している。

また、マスク着用に関しても混乱の極みだった。広く知られているように欧米人はマスクを嫌がる傾向が強いが、この国でも非常に顕著だった。感染拡大初期の頃、BBCではニュースでマスクについて「効果は無い、むしろ悪影響」という論調を連日繰り返して、街でマスクをしているのはアジア系のみでヘイトクライムの対象にもなった。しかし今では一転し公共交通機関や店舗の中でマスク着用は義務化され、罰金も科せられる。BBCも今ではニュースで「マスクをしていないといかに飛沫が広範囲に広がるか」のような話題を取り上げて国民にマスク着用を呼びかけている。こんなことは最初からわかっていたら、これまでさんざん言ってきたことへの反省も全くなしに、である。

ボリス・ジョンソン首相は4月にCovid-19に感染し一時は集中治療室に移されるほどに重篤な状態となった。幸い復帰できたが、その後彼は「自分が重症化したのは肥満のせい」として14億円もかけジャンクフードの広告禁止などの肥満防止キャンペーンを行った。肥満と重症化に相関は確かにあるらしいが、医療現場でマスクや防護服などの不足が叫ばれていたのだからそちらの方にお金を使えばいいのに、何かズレてしまっている。

この国が当初集団免疫に固執したのは、NHS（国民保健サービス）と呼ばれる医療制度が Covid-19 流行前からすでに崩壊していたことにあると言われている。筆者の友人が腹痛を起こして緊急外来を受診したところ 6 時間待たされた挙句 10 分ほどの診察で処方箋を渡されただけで終わり、薬局に行ってみればすでに閉店していてその日は薬も手に入らなかった、と言っていたがそんな状況がこの国の医療の現実である。その中で数多くの感染者が病院に殺到すればパニックになることは明らかであった。だから最初の政府のスローガンも「Stay at Home, Protect the NHS, Save Lives」であり、NHS を守ろう！（要するに『病院に行くな』）と呼びかけていたのである。

経済対策として働けない労働者、自営業者等への所得補償、個人向けローンの支払猶予、家賃滞納者に対する退去要請禁止などを迅速に行ったことは評価される対応だった。しかし、そうした施策はあっても失業率は上昇し、経済への影響は甚大な中、首相は EU とようやく結んだ離脱協定を一方向的に反故にする国内市場法を議会に提出し、本稿執筆時点（10 月 18 日）で英国は「EU との交渉は終わった」として国民に対し自由貿易協定無しの EU 離脱に準備するよう呼び掛けている。この疲弊した経済状況に無秩序な離脱が加わればいったいどれだけ国民を苦しめるのか想像できないのだろうか。残念ながら首相は離脱できれば他のことはどうでもいいという側近ばかりで周囲を固めてしまったため、もはやコントロールできない状態になってしまっている。

ロンドンの多くのインフラは 19 世紀のビクトリア朝時代に整備されており、最近これらが老朽化し改修が必要となっている。テムズ川に架かるハーマスミス橋は通行できなくなっているし、シンボルであるビッグベンも大改修中である。BREXIT といい Covid-19 といい、今のこの国の迷走ぶりを見ていると政治体制、医療制度等多くのものが社会インフラと同じく制度疲労を起こし機能不全に陥っているように思える。大英帝国の遺産を使い果たしてしまったこの国は果たして「G ゼロ」世界の中でどのような位置を占めることが出来るのだろうか。この国の文化、歴史を愛する一人として「Land of Hope and Glory」（希望と栄光の国、エルガー作曲の英国民の愛唱歌）を国民が誇りを持って歌える国であり続けてほしいと心から願っている。

以上